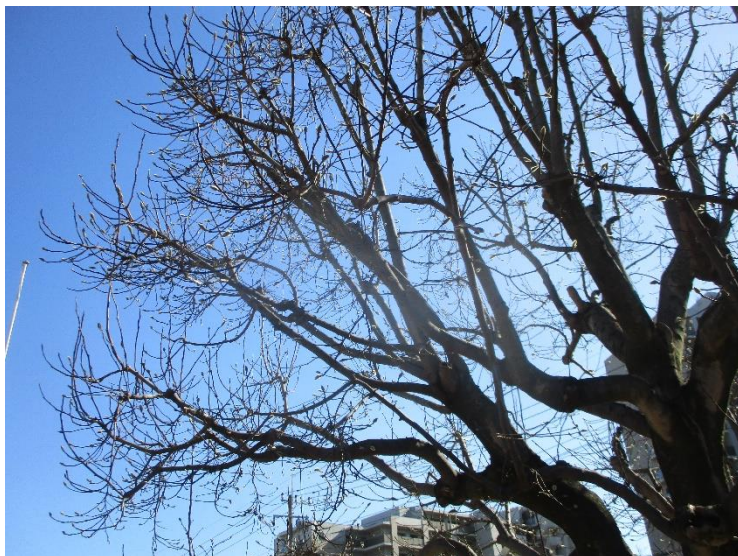


# 園のおたより



第 10 号

令和6年1月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

## ダンボール

園長 関 由紀子

幼児教育の素人の私が幼稚園に赴任して気付いたことがあります。園にはいわゆる市販のおもちゃは殆どありません。その代わり紙、はさみ、のり、テープ、自然のものなどを見事に使いこなし、子ども自らが自分だけの素敵な遊具を作り上げ、それを愛おしそうに用いて遊ぶのです。特に驚いたのが「ダンボール」の存在です。オンラインショッピングのお蔭で自宅も研究室にもダンボールがあつという間にたまり、ダンボールは私にとって片付けの仕事を増やす嫌な存在でした。けれども幼稚園ではダンボールは貴重な大人気の遊具です。1組さんのAちゃんは「これは私のダンボール」と大切に抱えて素敵なシールをたくさん貼っていました。2組さんのBくんは、切ったり貼ったりしながら素敵な電車を完成させました。3組さんは家だったり看板だったり、大きく大胆にそして実用的にダンボールが変身していきます。そして子どものみならず先生たちもあつという間に素敵な遊具をダンボールで作ります。今まで厄介なゴミでしかないダンボールにこんな可能性があつたのかと、工作力のない私はそれはそれはびっくりしました。

ある日、ある荷物を梱包していたダンボールが“大きな縦長”とめつたにない形だったので、3組さんの誰かが使わないかなあ、と声をかけてみました。すると、工作真っ最中の5人が園長室前までやってきました。けれども大喜びしたのはその縦長の方ではなく、テーブルが入っていた大きなダンボールの方でした。それを見た途端、5人は押し合いへし合いしながらダンボールの中に入り込み、「これは（工作に）使えないよ」、「でも欲しい!」、「家に持って帰りたい」、「大きすぎて無理だよ」、「とりあえず遊戯室に運ぼう」などと大はしゃぎです。5人はダンボールの中に入っていた緩衝材の細かい発泡スチロールを浴びて、みんな雪を被ったようです。そのまま仲良く大きなダンボールを遊戯室まで運んでいきました。そして数日後、今度は2組さんのお部屋に入ると、「園長先生、お届け物です」と呼びかけられ、そこには大きなダンボールがおいてありました。開けてみると子どもがびっしり入っているではありませんか。子どもにとってダンボールは切ったり貼ったり入れたりするだけでなく、入るものでもあつたのだと気付かされました。そして私の娘も昔ダンボールにうれしそうに入っていたことを思い出し、きっと大きなダンボールには“中に入りなさい”という「アフォーダンス」（2023年6月号参照）があるのだと確信しました。

子どもの頃にしか感じる事が出来ない「アフォーダンス」がきっとたくさん存在するのだと思います。そして、最近、私には残っていない子どもだけの「アフォーダンス」を見つけることを楽しみにしています。

## 「環境」を通じた教育

今冬は朝晩しっかりと冷え込む日があり、自然観察園のビオトープに氷が張ったり、日陰に霜が降りたりする様子があります。氷や霜を取ったり、水が凍るか試したりする遊びも各クラスで見られます。暖冬の年には体験できない自然現象との関わりですので、存分に楽しんでほしいと思っています。

さて幼児期の教育は、「環境を通して行う」教育であるとされています。「環境」という言葉が指すものは、状況によって様々ありますが、幼稚園など幼児教育の中では、子どもたちを取り巻く周囲のすべてを指します。家族や友達など周囲の人、遊具や用具など周囲の物、虫や草花など周囲の動植物のほか、社会の事象や施設、情報、空間なども「環境」に含まれます。冬の氷や霜、天気といった自然現象も「環境」です。そのような「環境」を通して幼児期の教育が行われるという考え方は、平成元（1989）年の文部省『幼稚園教育要領』で示され、その後35年ほど継続されています。私が大学で幼児教育を学ぶ中でも、当時新しく示されたこの「環境を通じた教育」について、繰り返し耳にすることがあり、幼稚園で実際に保育をするようになってからも、具体的にはどのようなことをしていけばよいのか試行錯誤してきました。最近では、環境を通じた教育とは、その人の「世界」が広がることと捉えるようにしています。

あるAさんという人の世界があります。雨が降った時、雨という世界と、Aさんの世界はまだ別のものです。しかし、Aさんがふと耳をそばだてて雨の音を感じた時、あるいはAさんが水たまりにそっと長靴を踏み入れた時、Aさんの世界と雨という世界が重なります。そして今までのAさんの世界が、少し形が変わり広がっていく…これが「環境を通す」ということです。

『幼稚園教育要領』等では、子どもたちにとって意味のある「環境」とは、物理的な近さではなく、心理的に身近であることが必要であること解説されています。氷や霜が近くにあったとしても、そこにあるだけでは「環境」とはなりません。子どもたちが実際に見て、触れて、気付き、感じることによって、氷や霜というものを知っていくのだと思います。さらに毎日の暮らしの中では、「冬」という世界も感じ取り、自分の中に取り込みながら、自分の世界をさらに豊かに広げていくのでしょうか。

幼児期の教育は、「環境を通じた教育」です。周囲の人、物、事柄、自然、社会事象などに、子どもたちが心理的な近しさを感じて関わっていくこと、その中で、それぞれのもつ「世界」と自分の「世界」を重ねながら、その人にしかない自分の世界を広げていくことを大切にしています。

(副園長)



## 1 くみ

### 「心を通わせる瞬間」

3学期が始まり最初は少し緊張した面持ちの人もいましたが、しばらく経った今では、のびのびと2学期より一回り大きくなった頼もしい姿を見せてくれています。大きな変化として感じるのが、友達との関わりがずいぶんと増えたことです。これまでも友達の名前を呼んだり、休みの人を気にかけてりする姿はありましたが、遊びや生活の様々な場面で、いろいろな意味合いをもった関わりが見られるようになってきました。

ある日、畳の場所で浮かぬ表情をしている人がいました。どうやらいつも同じ場所で遊んでいる友達が休みだったので、なんだかいつもと違う気分で、少し不安になっていたようです。二人はよく同じ場所で遊んでいます、たくさんお話するわけでも、遊び以外の時間にずっと一緒にいるわけでもありません。ただ、いるだけでいつもの遊びが始まるような安心感や楽しみを与えてくれるような存在なのだと思います。言葉に頼らずとも、どこかで心を通わせているのではないのでしょうか。

今月は保育参観もあり、お家の人と一緒に園でお気に入りの遊びをすることができました。楽しい時間を送った分、お家の人と離れる時間には寂しさで涙を流す人もいました。涙する人の隣で、その友達の一人が片手で電話を作り、「早く来てくださいね」と“誰か”に話し始めました。“通話”が終わると、「お母さんに早くお迎えに来てって電話しておいたから大丈夫だよ」と話しかけました。涙を流している友達を気遣う気持ちももちろんあるかと思いますが、自身が前に同じような気持ちを経験したことがあるからこそその関わりだったように思います。

生活の中での心動く関わりを通して、一つずつ大きくなっていく姿を大切に見ていきたいと思います。





## 2くみ



### 「友達」の存在

3学期が始まって約一ヶ月が経ち、「幼稚園でこれがしたい」と園で何をして遊ぶかを楽しみにしながら登園する姿が多くなっています。

室内では、家庭で経験した双六を作り始める遊びがありました。初めは「何を作っているんだろう」と周りの友達も不思議そうな様子でしたが、双六を作っていることを教えてもらおうと「ぼくも作りたい」と一緒に双六作りが始まりました。まず、大きな模造紙にどんどん道を繋げていくのを楽しんでいました。作り進めていくと、一緒に作っていた友達が「これ、どうやって遊ぶの?」という疑問をつぶやきました。この一言があったことで、道を進むためのマスを描き足したり、止まったマスで何をするのか決めたり、サイコロや駒を作ったり、オリジナルの遊び方がどんどん生まれていきました。友達と一緒に過ごすことで、自分にはなかった視点に気付いたり、難しい部分を補い合ったりしながら、遊びがより面白いものになっていくのだと改めて感じました。

また、寒さが厳しくなり室内で過ごすことも増えてきたので新しく「指編み」を紹介しました。「マフラーを作るんだ」と長くなるようにじっくりと作り進める人、「次は2つの色にするの」と自分の組み合わせ方をする人など、友達が作る姿や作ったものを身に着けている姿をきっかけに挑戦してみる人が増えています。自分で進められるようになってくると、「難しい」と言っている友達に作り方を教える姿もあり、友達同士で教え合うきっかけにもなっているようです。

3学期になり、友達の姿に刺激をもらいながら遊びが進んでいくことが増え、友達の存在があるからこそ遊びがどんどん面白くなっていくことを子どもたちも感じているのではないかと思います。一緒に遊ぶだけでなく、自分が見つけたものや作ったもの、自分がしている遊びを友達に伝えたいという思いも強くなっています。これからも、友達と心を通わせ合う機会を大切にしながら、共に生活や遊びをより面白くしていけるように支えていきたいと思っています。



### 3くみ

#### 「喜びいっぱい1月」



先日の保育参加では、子どもたちが、大好きなおうちの方を「わたしのようちえん」にお迎えしました。今楽しんでいることや一緒にやりたいことをした尊い時間だったようです。「お母さんがたくさん遊んでくれて嬉しかった」「お父さんとサッカーしてめっちゃ強かったから面白かった」「一点決められちゃったあのボール、止めたかったな」それぞれの嬉しかったことを言葉にしてくれました。子どもたちにとってあの時間は、自分や自分の幼稚園や遊びを肯定され、認められた気持ちも大きかったのだらうと思います。それから数日経ちますが、これまでの遊びを価値あるものとし、さらに自信をもって遊んでいるように感じます。

冬の畑に3種類の野菜の種を蒔きました。寒いので、ビニールのおうちの中でお布団をかけて育てています。すると、あたたかい野菜のおうちの中で、藍も芽を出しました。「お野菜が全部、藍に変身しちゃったりして」と笑っていたわたしですが、内心ドキドキしました。藍の生命力を知っていますから。ところが、わたしのつぶやきを聴いていた人がこう言いました。「藍がまた出てきたらさ、おもしろいよ。そうなったら今度はランチョンマット作ろうよ」と。目的とは違っても、それもよきこととして受け入れて遊ぶなんて、とても素敵です。立場上、この経験をしてほしいという願いがあるからなのですが、それが強くなると、思いと違うことや偶然のことを喜ばなくなることもあります。大切なことに気付かせてもらいました。豊かな人生を送っているのだと思いました。

さて、やっとできた梅干しを美味しく食べようと、学級のみんなで梅干しパーティーを計画しました。おにぎりを作って梅干しと一緒に食べることに決めました。準備として、お米を鍋で炊いてごはんになる様子に興味深く関わる中で、おにぎりがいくつできるかを確認しました。お米を持ち寄って、みんなと合わせると、瓶いっぱいになりました。そして、近所のスーパーに味噌を買いに行きました。これで準備はばっちりです。当日は、自分たちで実現する喜びを味わい、大満足のパーティーになりました。お休みの友達のことを思って「今度幼稚園に来た時に、食べさせてあげようよ」の言葉も聴けました。あたたかい気持ちになりました。